



試験の採点をしていると、いろいろな「残念」に出くわす。言葉を抜き出す問題で、解答方法が違っていて「×」になる答案。解答欄を間違えた答案。いい加減な書き方で正答にできないほど字形の崩れた、書き取りの漢字。こんな「残念」は、採点者にとっても「気の毒」という心の「毒」になる。

採点では、正解は「○」、間違いは「×」あるいは「レ」と書く。おとなりの韓国でも、正解が「○」だそう。しかし、ほかの国では必ずしも正解が「○」とは限らない。学生時代、中国人の先生が採点してくださった答案が「レ」ばかりで愕然としたことがあった。が、それは正解の印。欧米でも同じよう。人にもよるのだから、アメリカやイタリヤでは、正解が「レ」、間違いはその下に赤線を引くという。ちなみにドイツでは論説形式なので正解か間違

いかという出題すらなく、おかしい部分の下に赤線を引いただけだったのと。正解には「○」、間違いには「×」「レ」、というのは少なくとも万国共通ではない。

「×」の呼び方には方言差もある。どちらかといえば関東では「バツ」、関西では「ペケ」という傾向があるようだ。ほかにも方言による呼び方の違いはあるかもしれない。語源を考えるのは難しいが、「バツ」は「罰点」、「ペケ」は中国語の「不可」あるいは「不可以」からきている可能性がある。留学生の話によれば、中国では、「×」を、日本と同様にダメ、とか、間違い、という意味で使うことが普通らしい。もうはるか昔となった学生時代、研修旅行で秋の金沢に行ったことがあった。犀川（きしかわ）のほとり、師と仰ぐ先生に将来のことを相談した。先生は「研究

という生き方」について語ってくれた。私もそんな生き方を目ざそうと心に誓った。ふと見上げると、夕空に飛行機雲がちょうど十字の形で輝いていた。私はキリスト教徒ではないが、なんだか、壮大な、聖なる印のように見えた。がんばろう、そう思ったのだ。

ところで、先日試験の採点をしていてふと気付いた。十字は、ちよいと四十五度ばかり傾けて見ると、バツであるいはペケ（×）になる。志をもつて見上げたあの雲は、空高く描かれた聖なる十字だったのか、はたまた、大空いっぱい巨大な「×」だったのか？……答案用紙の誤答に大きく「×」と書こうとした手を思わず停めてしまった私なのであった。

早稲田大学教授

森山卓郎
もりやま たくろう